



「見たり、聞いたり、探ったり」No.225

通算 No.377

青 木 行 雄

「大分県、^{てきざんそう}的^{ようこくじょう}山^{じょう}莊」 (「城下かれい」という魚料理)

城下かれいと言うと魚料理の食通の人には大分のふぐ料理・ハモ料理、関サバ・関アジと共に知る人ぞ知る有名な魚料理である。そしてもっとも有名な場所が大分県「^{てきざんそう}的^{ようこくじょう}山^{じょう}莊」と言うことになる。この城下かれいはどんなかれいかと言うと、温泉で有名な別府温泉のある別府湾の真向いに日出町と言う所に昔、「^{ようこくじょう}陽谷城」と言う城があった。この城の下^の別府湾の一場所に湧き水が出る場所があって、そこで生息している魚・かれいがいた。このかれいは大変味が良く、城の献上品として長く重宝されていたという。こんなことから「城下かれい」と呼ばれるようになった。今でもとれるが漁獲量は大変少なく大変重宝されている。

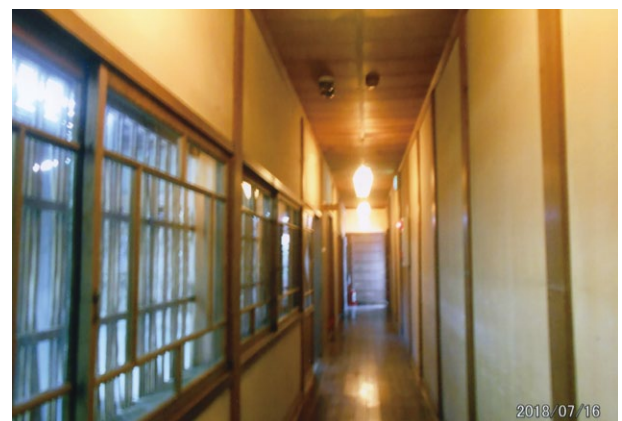
この「^{てきざんそう}的^{ようこくじょう}山^{じょう}莊」について

^{てきざんそう}的^{ようこくじょう}山^{じょう}莊は、大分県速見郡日出町にある1915年(大正4年)完成の邸宅(別邸)で国の重要文化財に指定されており、大分遺産にも選定されている。現在は日本料理店として営業しているが、2018年(平成30年)7月16日、縁あって東京より26人でこの「城下かれい」を食べる為に訪れた。すばらしい庭園は国の登録記念物に登録されている。

この^{てきざんそう}的^{ようこくじょう}山^{じょう}莊の沿革について調べてみると、昔、大分県杵築市山香町にあった馬上金山の経営で財をなした^{なりきよひろえ}成清博愛氏が、日出町に建てた別邸である。「^{きつぎ}的^{ひろえ}山」は鉾山を当てるという意味で博愛の雅号に由来するらしい。



※木造平屋の玄関で築80年になる



※廊下のガラスは手作りで作られた、気泡が入っている

木造近代和風建築で細部にまで資材、技法にこだわり、多くの職人を雇い入れ短期間で完成させたという。完成当時の敷地面積は、3,670坪、邸宅の建坪は247坪であった。

1991年（平成3年）に「**的山莊**（附日本庭園）」として日出町の有形文化財になる。

2014年（平成26年）には建造物5棟および土地が「旧成清家日出別邸」として国の重要文化財に指定された。

2015年（平成27年）には庭園が「旧成清博愛別邸庭園（**的山莊**庭園）」として国の登録記念物に登録されている。



※「**的山莊**」入口の玄関



※庭園から入口の玄関を望む。この左側に皇室の方々の植樹の木がある



※玄関の入口「**的山莊**」



※やっと玄関近くに来ました。玄関前の庭樹連



※皇太子殿下（現天皇）・妃殿下記念樹



※現皇太子殿下・妃殿下記念植樹



※初代総理大臣、伊藤博文公の書である。説明は文中にあり



※文中にある富士の絵。下に書かれている松の木は三保の松原を描いたという



※玄関を入って上った所にある「獅子」の絵だが、反射してよく見えない。桑の木で出来た額縁も「和田三造」の作品である



※庭園から見た借景、ちょうど天気が悪く良く見えないが、高崎山を築山に別府湾を池に見立てた借景技法が用いられた庭園



※この廊下から天気の良い日は別府湾が望める。



※壁の穴は太平洋戦争中に撃たれた弾痕、至る所に見ることが出来る

1964年(昭和39年)から成清家による料亭として営業をはじめ、写真にもあるように皇族方もたびたび訪れている。

2010(平成22年)にこの「的山荘」の所有が成清家より日出町の所有に移り、2011(平成23年)より、指定管理者である㈱「まるひで」と言う会社が運営することになった。

こんなわけで今回この的山荘にこの「城下かれい」を食するために訪れたわけだ。



※文中に書いたが襖でこの金具が梅の模様が施されている。絵は紅葉したヤマブドウ



※26人の東京からの仲間で「城下かれい」を堪能した

まず表門^{おもてもん}を入ると庭園があり、両側に皇族方の植樹木が並び、70m程歩くと表玄関がある。靴を脱いで階段を上ると左側に応接間があり、その先に大広間がある。梅の間15帖、竹の間15帖、松の間18帖、この3間が通しの間となり48帖となる。この広間の奥に「國本」と書いた書があるが、日本の初代総理大臣「伊藤博文」の書という。国本とは「国が一番の基であり国のことを考え、国のために尽くさなければならない。自分がそうであるように皆にもそうであってほしい。」という願いが込められていると書かれていた。

この広間にかけている「富士山」の絵があるが、明治末期から昭和前期まで活躍したという、現・福岡市城南区出身の日本画家・「今中素友」^{いまなかそゆう}の絵である。幅3.2mの大きさで、富士の裾野に見える松は三保の松原を描いたと言うが、すばらしい富士山の絵が飾られていた。

とにかく、見事な絵や書も多く、玄関の入口の間におかれている立軸の絵は、私の写しが悪く良く見えないが、第一回文部省美術展覧会において最高賞を受賞した日本洋画家の「和田三造」^{わださんぞう}が描いた獅子^{しし}である。

三造の兄^{こうぞう}三造が馬上金山の技師長であった事から当的山莊家主である成清博愛^{ひろえ}や息子の信愛^{のぶえ}が援助をし、この邸宅でも創作活動をしていたという。この額縁も桑の木で出来た三造の作品という。

またこの邸宅は大正初期に建てられた建物で、太平洋戦争にもめげず生き残った建物だが至る所に弾痕があって今でも見ることが出来る。

特に大広間の廊下より別府湾を眺める風景は別格で、見事な風景であり、天気の良い日には別府湾、高崎山とそれはそれは大変な展望である。

パンフを見ると、この庭園は、高崎山を築山に、別府湾を池に見立てた借景技法が用いられた庭園と書かれており、ちょっと規模が大きすぎる。この邸宅の特徴の一つで、大広間奥の梅の間からもこの景色を楽しめるよう、天井が高く造られているというから、見事という他はない。

また、応接間の絹張の襖には紅葉したヤマブドウが描かれている。ヤマブドウには子孫繁栄と火災を防ぐ意味があるという。引手金具には梅の模様が施されている。

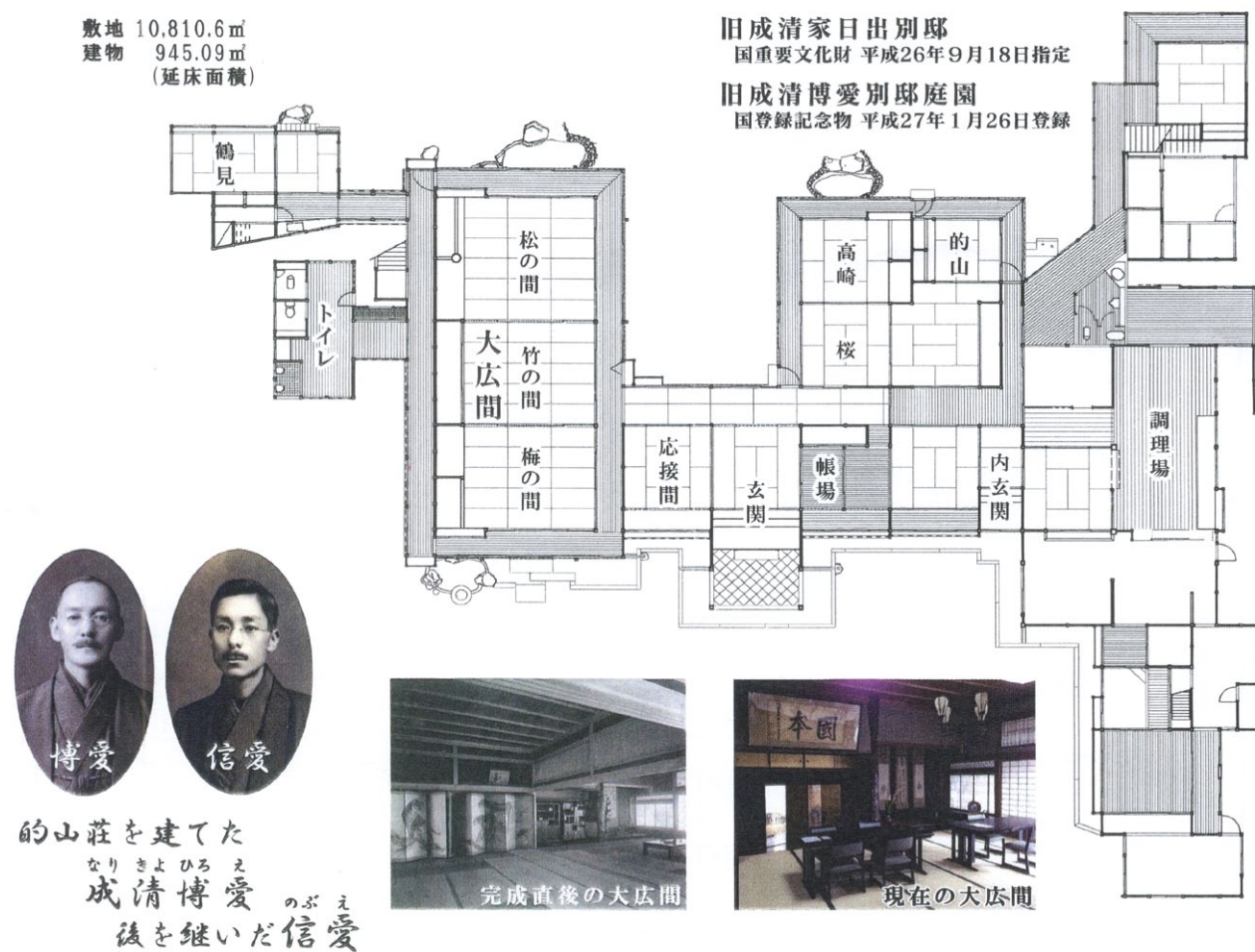
是非一度、大分まで出かけて、この「城下かれい」を食してみてください。

大分県速見郡日出町^{ひで}2663番地

日出町の山荘 0977-72-2321

的山荘パンフより

平成30年10月28日 記



「木場ことば」

居職材〈いじょくざい〉

◆職人を大きく分けると出職人と居職人となる。大工や木挽のように、得意先の現場に出向いて働くのが出職人で、建具屋、折箱屋、指物屋のように自己の仕事場をもつのが居職人である。

◆出職人は天気の悪い日などには仕事にならないので、手間賃が高く、宵越しの金は持たないという気質。居職人は年がら年中、家に居てこつこつ働くので日当は低く、ジミなふりをしているのが普通である。

◆出職人は施主の提供する材料を使うのだから、材木の手当てに苦労はない。ところが居職人の方は、自ら材料を備えて、腕に物をいわせなければならないから、材料の吟味はやかましい。

◆建具屋ならば杉や檜のヒラ、折箱屋ならば、秋田杉二分三厘の並板、指物屋ならばナラ八分板や檜のヒラというように、主として使用する材量が異なる。この木材が居職材である。

◆居職人は実直ではあるが、なかなか細かいので、その事情をよく呑みこんでおらぬと、うまく材料の供給ができない。そこで居職材扱い専門店というものも成り立つわけだ。

◆機械を使って、戸障子などの大量生産をする建具工場の材木は居職材ではなく、はっきり機械建具材という。建具用の材木だから何でも居職材だということにはならない。

引用文献：『木場ことば集』 宮原省久編著 東京木材市場株式会社 昭和44年(1969年)11月
p.40～p.41

